高知県立坂本龍馬記念館だより　2021（令和3）年1月　第116号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

一灯

ひとう

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

鶏口 KEIKO GYUGO 牛後

ここは館長の部屋

開館30周年を迎える記念館

コロナ禍に終始し、めっきり賑わいが遠ざかった感の一年が過ぎ、令和3年を迎えた。いまだに終息が見通せない中、ウィズ・コロナであっても、今年が皆様にとって、希望と活力に満ちた時代に向けた歩みのリスタートの年になることを心から願うものである。

今年の干支は「丑」である。子供のころに聞いた干支の由来では、元旦に神様のもとに早く挨拶に来たものから順番に、一年交替で数ある動物たちのリーダーを務めることができるということで競争した結果、現在の子、丑、寅、卯・・・の順となったということであったが、真面目な牛の背中にちゃっかりと便乗して行ったネズミが一番乗りになったことに、子供ながらに釈然としない思いを持たれた方も多いのではないだろうか。また、12種の動物の中に、古来私達の身近にいたはずの猫がネズミに騙されて競争に参加できなかったことに対しても憤りを感じたことを憶えている。皆様はどうでしょう。

どうも牛のイメージとしては、「牛歩戦術」とか「鈍牛」といった言葉のせいか、歩みが遅く、物事が遅々として進まないとの感を持ちがちであるが、丑年は、将来に向けて先を急がず、一歩一歩着実に事を進めることが必要な年とされているようである。コロナ禍に耐えながら、いろいろな我慢が求められる中ではあるが、牛のように慌てず、騒がず、どっしりと構えたいものである。

さて今年は、幕末維新史にとって、また、当館にとっても、節目の年である。

維新史では、日本が破約攘夷（不平等条約を改定し、欧米諸国と対等な関係に立つ）を目指すうえで不可欠であった国の形を、幕藩体制をベースとしてきた封建国家から中央集権による近代国家へと生まれ変わらせるための「廃藩置県」が断行されてから150年に当たる。当館の守備範囲からは少し離れるかもしれないが、全国各地でこれに因んだ興味深い様々な展示が催されるものと期待される。

一方、全国の龍馬ファンの方々からの8億円にも達する募金をもとに、「龍馬生誕150年記念事業実行委員会」が建設し、県に寄贈することによって平成3年に誕生した記念館は、11月15日を以て、満30歳の誕生日を迎えることとなる。

県立施設である記念館の設置目的は、県の条例で「坂本龍馬の業績を顕彰するとともに、県民文化の振興及び観光振興に寄与するため」とされているが、このうち、観光振興については、前知事の尾崎正直氏が、先に記した実行委員会の副委員長を務められ、現在も全国龍馬社中の会長としてご活躍されている橋本邦健氏の著書「龍馬道～あきらめない力～」の巻頭で、こう述べられている。「高知県には、『坂本龍馬像』と『県立坂本龍馬記念館』という、二大観光モニュメントがあります。・・・その二つのモニュメントが、土佐の志ある青年たちの力の結集によって、建立まで至ったことをどれだけの方がご存じでしょうか。時間の流れとともにそこにあることが当たり前になって、今の高知県の観光においてはゆるぎない存在である・・・龍馬の故郷にある施設が銅像だけで、龍馬を顕彰するのに心もとないものだったとしたら、どうだったでしょうか。高知にいらした方を、がっかりさせてしまったかもしれません。」

桂浜が龍馬顕彰の「聖地」の一つとなり、本県の観光振興に少なからず貢献してきたことを表す至言ではないだろうか。

観光振興を含め、記念館が設置目的を果たし得たのかどうか。皆様からの評価を俟つとともに、今秋の刊行を予定している30周年記念誌上での総括に譲ることとしたいと思う。

入館者の皆様の「犇（ひし）めき」は避けながら、記念の年に相応しい賑わいが戻ってくることを希求する年初めである。

髙松 清之

「龍馬の知恵袋・福井藩」展

前期：令和2年12月26日（土）～令和3年2月14日（日）
後期：令和3年2月18日（木）～同年4月11日（日）

幕末の福井藩は、16代藩主松平春嶽を筆頭に有能な人材を多数輩出しており、重要な藩の一つである。その春嶽と15代土佐藩主山内容堂は深い交流があった。そして、龍馬にとっても福井藩は知恵袋的な存在であり、三岡八郎や政治顧問として招かれていた横井小楠らとの交流が、のちの龍馬の国家構想に大きな影響を及ぼした。

幕末維新期に活躍した藩を一括りに表す言葉として、薩長土肥や一会桑などの言葉がある。薩長土肥は薩摩藩、長州藩、土佐藩、肥前藩のことで、倒幕の立役者であり新政府の中心となった藩のことである。一会桑は御三卿の一橋家と会津藩、桑名藩のことで、幕府を支えた中心勢力である。

そういう括りには入らないが、御家門中第一の家格を持つ福井藩も藩主・松平春嶽を筆頭に橋本左内、由利公正らが大いに活躍した。しかし、小説やドラマなどで取り上げることが少ないためか、福井藩がどれほど重要な藩であるかを知らない人も多いと思う。

福井藩の藩祖は結城秀康で、徳川家康の次男である。家康の長男・信康は織田信長の命により自刃しているため、秀康は家康の跡を継いで将軍になってもおかしくない人物であった。しかし、羽柴家（のちに結城家）へ養子に出ていたこともあって、二代目の将軍になったのは弟の秀忠だった。福井藩のような御三家・御三卿以外の徳川将軍家の親族は「御家門」と呼ばれた。福井藩主はのちに松平姓に復したことから、越前松平家と呼ばれ、同じく御家門として有名な会津松平家よりも格上とされた。

こうした成り立ちの福井藩に、16代目藩主として、御三卿の田安家から養子に入ったのが春嶽である。春嶽はよく人を用い、聡明で思慮深く勤勉な性格で、藩士から慕われ、家柄も人格も幕府を支えるには最適な人物であった。しかし、福井藩は親藩なので、基本的には幕府政治に参加できず、老中や大老職に就くことは難しい。それでも春嶽に幕政への参加を望む声があり、文久2（1866）年には政事総裁職に就いた。この職は大老とほぼ同じで、今でいえば総理大臣のようなものである。その春嶽が政事総裁職在任中に書いたと考えられる『虎豹変革備考』は、イギリスの政治を参考にして二院制の議会制度などを取り入れた非常に先進的な幕政改革案である。

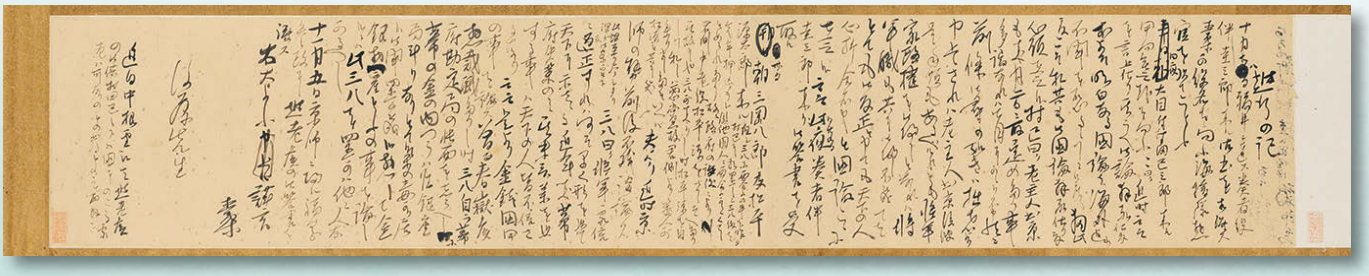
龍馬は脱藩してから何度も福井藩や福井藩邸を訪ねて行き、春嶽や横井小楠、三岡八郎（のちの由利公正）らに面会を求めた。龍馬はこうした人々から公議政体論や大政奉還論、経済論など多くの事を学び、やがて実現に向けて行動を起こしていく。まさに福井藩は龍馬の知恵袋である。

そして、春嶽と親しかった容堂が、後藤象二郎の提案した大政奉還論をすぐに受け入れることができたのも、春嶽との交流があったからだと考える。春嶽と容堂の性格は、大きく違うように思うが、容堂には時代を見極める目と知性があり、相手が誰でも臆することなく意見を述べる胆力もあり、春嶽には必要な友だったようだ。容堂の方も春嶽を常に頼りにしていた。

容堂は大政奉還建白書を幕府へ提出する際、上京する後藤に春嶽宛ての紹介状を書いて渡している。大政奉還後には必ず春嶽の力が必要になると考えていたのだ。しかし、後藤は大政奉還後に土佐へ報告のため帰国したので、代わりに龍馬が福井を訪れた。

このように、龍馬や幕末の土佐藩を語る際、福井藩は欠かせない存在である。おそらく容堂と龍馬が、新国家で最も頼りに考えていた人物は春嶽だったのではないだろうか。本展では、こうした福井藩と土佐藩との関係と、福井藩の人々と龍馬との関係を紹介したい。

三浦 夏樹



慶応３年 11 月後藤象二郎宛坂本龍馬書簡　秦家所蔵　当館寄託

「手紙の世界」展を振り返って

令和2年7月7日から9月22日まで、企画展「手紙の世界―龍馬で古文書ことはじめ―」が開催された。この社会情勢下、来館者が例年より少ないのはやむを得ないとして、それでも多くの方にご来場いただいた。ギャラリートークの時間短縮等、新型コロナの影響がなかったわけではないが、幸いそれは比較的小さく済んだ。開催期間中に感じたことを含め、今回の展示を振り返る。

第３章「色のいろいろ」の展示風景。色紙に書かれた古文書が並んだ。

展示の構成と概要

「手紙の世界」というタイトルに、二つの意味を込めた。ひとつは、字面の通り「手紙」を取り上げるという意味である。手紙は、書状や書簡などとも呼ばれる、古文書の代表格である。つまり、本展はいうまでもなく古文書展である。もうひとつは、「紙」に注目するという意味である。紙の特徴を考えることも、いわゆる古文書学の一部ではあるが、博物館で古文書が展示される場合、普通は内容（何が書かれているか）こそが重要であり、その紙自体が注目を浴びることはまずない。ところが、本展は「土佐の」古文書展である。紙業が盛んな土佐の古文書事情は、必然的に紙漉きをめぐる文化や政治と密接な関係があった。このような観点から、土佐藩ならではの事情を念頭に、紙そのものにも注目しようとした。

本展は四章構成としたが、そのうちの第三章を「色のいろいろ」と題して、紙の色に注目した。他の章の内容は、土佐の古文書類の展示ではあっても、紹介する特徴は全国共通のものが多かっただろう。しかし、ここで取り上げた紙の色は、土佐藩独自の事情を多分に含んでおり、本展の大きな特色になったと思われる。土佐にはいわゆる「土佐七色紙」の伝説がある。七種あったとされる色紙のうち、本展では黄紙と桃色紙を特定し、展示した。特に黄紙については、これまでその実態はほとんど知られていなかったと思われる。

新たな試み

9月5日、関連企画として講演会「紙をめぐる土佐の文化と政治」を開催した。全体を二部構成とし、前半は、有吉正明氏（高知県立紙産業技術センター主任研究員）による「江戸時代の紙とその原料及び土佐七色紙」で、残された文献に記される製法に従って土佐七色紙を試作した経過と結果、およびそれにもとづく文献の正確性についての考察が示された。後半は、展示担当者による「幕末の色紙制度」で、土佐七色紙のうち藩内での流通が確認できる黄紙・桃色紙について、幕末における使用実態ならびにその政治的意義を論じた。全体に「土佐七色紙」という共通のテーマを設定した上で、紙の製法や成分分析の専門家が技術面を、文献史学の立場の者が政治面を、それぞれ異なる視角から講演するという、今までにない試みであった。

また、会場にて配布したリーフレットには、折り紙遊びの要素を加えた。ガイド線に従って順番に折ると、手紙を包んだ包紙（江戸時代の〝封筒〟）が再現されるというものである。狙い通り、親子連れが興味を示すことが多く、会場の外でリーフレットを折る子供の姿がしばしば見られた。会期が学校の夏休み期間と重なったが、展示内容を子供にも楽しんでもらう意味で、一定の役割を果たしたのではないかと考えている。ハンズオン（体験型学習）の予定は他にもあったが、コロナ対策の一環で断念せざるを得なかった。その点、心残りがないわけではないが、極力多くの方に楽しさと分かりやすさを提供できるよう努めたつもりである。本展が、来場いただいた方それぞれにとっての「古文書ことはじめ」となったのであれば幸いである。

髙山 嘉明

会場配布のリーフレット。折ると「包紙」が再現される。

学芸員の視点

色紙（いろがみ）と龍馬・土佐藩邸・坂本家

高山 嘉明

令和2年7月7日から9月22日まで開催した企画展「手紙の世界―龍馬で古文書ことはじめ―」では、いわゆる土佐七色紙を展示の柱のひとつに位置づけた。伝説的に七種あったとされる土佐で漉かれた色紙のうち、黄紙と桃色紙を特定し、その実物を展示した。特に桃色紙と龍馬との関係については、展示解説や講演会でも触れたが、十分に紹介しきれない点もあったように感じている。あらためてここにまとめておきたい。

桃色紙が使われた龍馬の手紙

慶応3（1867）年6月24日、龍馬は家族に宛てて二通の手紙を書いた。一通が、兄の権平へのもの。これは、以前龍馬が家宝を送ってほしいと懇願したのに対し、権平が刀（吉行）を届けてくれたことへの謝辞に始まり、追伸ではいろは丸沈没事故の談判のことが述べられる。もう一通は、姉の乙女と姪のおやべの二名に宛てたもの。現存する最長（5メートル超）の龍馬書簡として有名で、おやべの夫である清次郎の悪評や、姉からの批判に対する反論など、荒れた書きぶりが面白い。

内容はさておき、今回注目するのは、手紙が書かれた紙の色である。この二通の手紙こそ、桃色紙が使われた龍馬書簡なのである。

藩・藩邸との関係

詳しい事情は割愛するが、慶応2（1866）年4月、桃色紙が土佐藩の公用紙（公的文書に使用される紙）に指定され、同年7月より藩内での使用が始まった。龍馬がこの手紙を書いた時、桃色紙はまさに藩の公用紙だったのである。

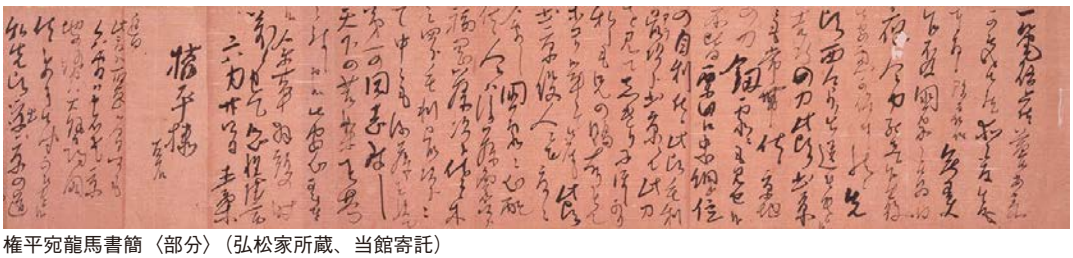
龍馬の桃色紙の手紙が、二通とも同じ日付である点に注目したい。龍馬がこれらの紙を入手したのは同じタイミング、むしろこの二通は同じ紙からなると考えるのが自然である。その紙の入手先が問題となるが、この時期、龍馬が京都を中心に活動していたことは間違いない。桃色紙が土佐藩の公用紙であることをふまえれば、必然的にその出所は限られる。最も可能性が高いのが、京都にあった土佐藩邸である。

当時、龍馬はすでに海援隊長として土佐藩の組織に復帰していたが、京都の藩邸とは距離を置いていたというのが一般的なイメージだろう。もし、龍馬が桃色紙を藩邸から譲り受けたのであれば、このようなイメージを少し改める必要があるかもしれない。ただし、藩邸そのものとの関係なのか、藩邸に出入りする特定の人物との関係なのか、この点はまた別の問題だろうが。

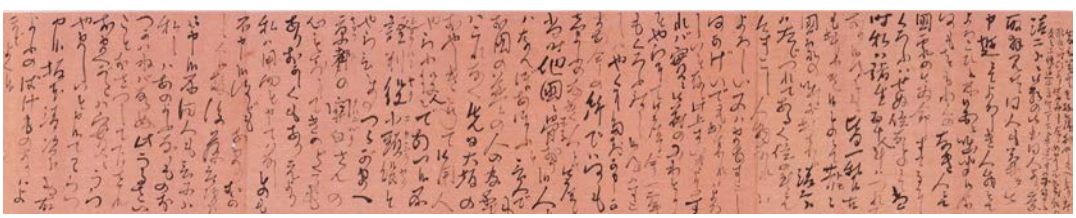
家族との関係

ところで、なぜ龍馬は家族宛ての手紙を、わざわざ桃色紙に認めたのだろうか。ひとつの可能性として、公用紙云々は抜きにして、単純に珍しい綺麗な色の紙を家族に見せたかったのかもしれない。ただし、当時の龍馬の立場からして、この桃色紙が土佐藩の公用紙であることを知らなかったとは考えにくい。さらにもう一歩踏み込んで考えるならば、逆に手紙の受け手（権平・乙女・おやべ）は、このような公用紙の存在を知っていたのだろうか。これは非常に難しい問題だが、その数年前に京都詰めの公務経験もある権平であれば、あるいは知っていたかもしれない。そうであるとすれば、桃色紙の手紙を送ったことは、龍馬が土佐藩においてしかるべき立場になったことのアピールだったろうし、受け取った家族も誇らしかっただろう。このことを言外に示すことが、家族宛ての私信にあえて公用紙を使った、龍馬の意図ということになる。そして、この二通に書かれた内容を考慮すれば、家族間のやりとりではあっても、色紙による手紙の〝権威付け〟の意図がなかったとも言い切れないだろう。推測を重ねた話ではあるが、龍馬の家族関係の新たな一面を垣間見るようである。

このように、紙に注目すれば、時として手紙の内容をさらに豊かにする周辺情報を得ることができる。〝紙が語ること〟に想像を膨らませるのも、手紙（古文書）の楽しみ方のひとつである。



権平宛龍馬書簡〈部分〉（弘松家所蔵、当館寄託）



乙女・おやべ宛龍馬書簡〈部分〉（複製、原本は京都国立博物館所蔵）

龍馬の手紙 09

朝廷というものハ国よりも
父母よりも大事にせん
ならんというハきまり
ものなり
（文久三年六月十六日付池内
蔵太母宛）

当館が所蔵しているこの坂本龍馬自筆書状は、龍馬の旧知である池内蔵太（くらた）が脱藩した翌月に、内蔵太の母に宛てて書かれた手紙である。

前半部分では、「朝廷の思し召し」を貫かない土佐をはじめとする諸藩の殿様方の不甲斐なさに憤慨しながら、「数ならぬ身である自分たちであっても、天皇の御心を安め奉りたいと思っている」と、志士たちのありのままの気持ちを述べている。

そして、「朝廷（天皇）」が、当時大事にすべきとされていた「忠義（国）」や「孝行（父母）」に勝るのは自明の理であると定義づけ、大事にすべき事柄を多重に破る大罪である脱藩を、敢えて選択する志士たちの決意を擁護している。

この手紙は、「脱藩する志士たちの心情を龍馬がわかりやすく代弁したもの」として知られているが、この代弁自体も内蔵太の気持ちを母に説明するためであり、「このように相当の覚悟をもって天皇のために行動したのであるから、周囲にいろいろな事を言われるであろうが、逆に泣き暮らすのは内蔵太の名折れになる」という論法で、「もう泣かないでください」と慰めの言葉をかけている様が想像される。

加えて、後半部分では、「また改めて手紙を書く際には、このような珍しい話をしましょう」と、龍馬が京都周辺で見聞きした話を挙げており、内蔵太母の気持ちを引き立たせようとする配慮が感じられる。そして、最後は「いささか御心をやすめんとて」という、思いやりのある言葉で結んでいる。

この手紙は、「志士たちの心情を龍馬が表している」という面で注目され、評価されているものであるが、個人的には、「ひとたらし」と称す事ができるであろう龍馬の横顔を垣間見る事ができる手紙なのではないかと思っている。

藤田 有紀
（佐川町立青山文庫　学芸員）

私のおすすめ No.9

くじら日時計

本館海側の八策広場南に、大人の背丈ほどの大きな日時計があるのを見たことがありますか？この日時計は、平成３（１９９１）年11月、当館が開館すると同時に現在の場所にお目見えしました。いきさつとしては、高知南ロータリークラブが平成元（１９８９）年に創立30周年を迎える記念事業として当館に寄贈をしたというものでした。また、その造形から鯨のイメージが浮かび、「くじら日時計」という愛称で親しまれてきました。

さて、ここからは天文学的なお話になりますが、この日時計の正式名称は「アナレンマ式円環型日時計」と呼びます。「アナレンマ」とは、１年間毎日同じ時刻に同じ場所で太陽の位置を記録すると描き出される図形のことをいい、その形は細長い８の字になります。ひょうたんのような形の投影体は、その８の字をかたどっています。

ここでは詳しい説明は省きますが、この形には、季節によって太陽の高度が南北に大きく変化をすることや、均時差と呼ばれる「視太陽」と「平均太陽」との位置の差が関係してきます。これらのズレは本来ならば補正する必要がありますが、ひょうたん型の投影体を映した影を見る位置を変えることによって、長い年月にわたりその必要がなくなるわけです。

本年、当館は開館30周年を迎えます。３年前のリニューアルオープンの時には、同クラブ創立60周年記念と合わせ、最新式ソーラー時計「ＲＹＯＭＡ時計」が新たに寄贈されました。当館へお越しの際は、アナレンマとソーラーという太陽を利用した新旧の時計が当館の歩みと共に静かに時を刻んでいる姿に、改めて注目してみてください。

くじら日時計の見かた、および日時計のしくみについてさらに詳しくお知りになりたい方は、次の参考文献をお勧めいたします。

午後１時前のくじら日時計

【参考文献】
『太陽の時角を測る―日時計のしくみ―』
田中真一 著（１９９２年）南の風社

池澤 侑美

ウォーキングイベント・史跡巡り

「高知のまちと幕末人物銅像めぐり」

12月6日（日）、ウォーキングイベント・史跡巡り「高知のまちと幕末人物銅像めぐり」を開催いたしました。お天気にも恵まれ、JR入明駅からJR高知駅（いずれもJR四国・土讃線）まで、高知城を中心に時計と反対周りのコースを進みました。

JR入明駅には昨年7月に「志の龍馬駅」と愛称がつきましたが、愛称含め人名が入ったJRの駅名は全国でも初めてということです。駅前にたつ、同じく7月に除幕された「**志の龍馬像**」から、ウォーキングをスタート！上に向かって、大きく腕を広げ、草鞋履きの龍馬は、作者の平地正利さんによると、志を胸にこれから脱藩、旅立つ20代半ばの龍馬だとのことです。

次に向かうのは、高知公園「**板垣退助像**」。ここで、県立高知城歴史博物館の高木翔太学芸員が、町歩きの某有名番組のごとく、高知城の追手門前に登場、銅像となった偉人や高知の町についてご案内をいただきます。板垣自身の説明はもちろん、今立っている銅像は戦後の再建である等々のエピソードをお話くださり、参加者一同、うなずいたり、驚いたり。

3人目の銅像は丸ノ内緑地内の「**野村茂久馬像**」です。野村は「土佐の交通王」と言われる実業家ですが、今回は、桂浜の龍馬像建立に尽力した人物として紹介。実は、この像は緑地の端にあり、参加者の皆さんも「知らなかった」と驚いておられました。

次は、県庁に隣接する県議会議事堂前に堂々と立つ「**片岡健吉像**」を見学。明治2年、片岡は谷干城と共に、財政再建のため経費削減を推進。当初は納得していた板垣も、東京出向中の役人の経費を削ったことに激怒、洋行予定を中止し、帰高します。片岡は板垣に懐柔されましたが、谷は今でいう「パワハラ」のような仕打ちをうけ、結果的に辞職します。その後、片岡が谷を訪問しても簡単には許してもらえなかった…というエピソードをご紹介いただきました。

県庁を出発すると、しばらく銅像はありませんが、「**乗出**（のりだし）」や「**升形**（ますがた）」などの土佐藩ゆかりの地名の説明などを聞きながら、高知市立龍馬の生まれたまち記念館に向かいます。**龍馬生誕地の碑**を見学した後、「**龍馬郵便局**」へ。この郵便局は、元は「高知上町一（かみまちいち）郵便局」という局名でしたが、1999年に全国唯一の人名の入った局名「**龍馬郵便局**」に改称しました。龍馬生誕地にある郵便局にふさわしく、龍馬ゆかりの風景印なども押してもらえるそうです。

高知市立龍馬の生まれたまち記念館に到着、高木学芸員とはこちらで一旦お別れ。昼食をいただいた後、同館の森本琢磨学芸員から展示の説明をしていただきました。こちらでは、「**龍馬、乙女、近藤長次郎**」の3人を見学。隣に座って、龍馬さんと一緒に記念撮影がする参加者もおられました。

昼食後、再び出発、高木学芸員も再登場です！山内神社境内の銅像「**大政奉還を寿ぐ山内容堂像**」を、高木学芸員のお話を聞きながら見学。お酒が好きな容堂公らしく、盃を手に、胡坐をかいた姿は、他の銅像とはちょっと異なる雰囲気でした。この後は、**武市瑞山殉節地**、**大川筋**を通って、JR高知駅「**三志士像**」前にゴール！約8.5kmの道のりでした。

高知市街地を中心としたコースでしたが、参加者の皆様からは「いつも通っている道なのに、知らないことが多かった」「楽しかった」等々のお声をいただきました。皆様も、町歩きを通して、地域の歴史を発見、体感してみませんか？

河村 章代

— 高知家のアニキ —

三山ひろしさん

一日館長任命

10月８日　高知県出身の演歌歌手“三山ひろし”氏の一日館長の委嘱式が、当館新館１階ホールにて行われました。

三山氏は、皆様もご存じのとおり、年末に行われるＮＨＫ紅白歌合戦に６回出場するなどの高知県出身の演歌歌手で、昨年９月15日には「高知家のアニキ」にも任命されました。

超多忙な日々の中、高知家の一員として最初のお仕事が当館の一日館長となりました。

当日、委嘱式が行われるホールには12時から入場でしたが、開館前から館の周辺には、普段は当館とご縁がなさそうな雰囲気のご婦人方のグループがあちらこちらに。ホールでは、人数制限もあり委嘱式を見ることができない方も出るなど、三山氏の人気の高さが窺われました。

式では、ファンの皆様が見守る中、三山氏に対して、濵田知事から高知県の観光特使として本県のＰＲ等へのご協力に感謝の気持ちが伝えられ、「高知県立坂本龍馬記念館の一日館長」委嘱状の授与とともに「一日館長」のタスキがかけられました。今年で開館30年を迎える当館では初めての一日館長就任です。

三山氏からは、坂本龍馬の志をうたった「いごっそ魂」を歌うことは土佐人として誇り高いと思っていると同時に、龍馬の行動・想いと自らの気持ちがリンクしていることもあり坂本龍馬が大好きであること、これからもますます高知の良さをＰＲしていきたいとの力強い言葉をいただきました。

その「いごっそ魂」は当館の南側の日時計に隣接して歌碑として設置されており、当日は委嘱式に続いて、その歌碑の除幕式も行われました。

小雨降る中、坂本家の家紋の入った衣装の三山氏、濵田知事・岡崎市長等が同席され、除幕式が行われ、除幕された歌碑の前で「いごっそ魂」を披露。ファンの方々と笑顔で記念撮影に応じるなど、サービス満点の除幕式となりました。

そして、いよいよ一日館長としてのお仕事、坂本龍馬について、より深く学ばれる時間と、ファンの方々への案内です。講師として案内した当館の三浦チーフによると、三山氏と坂本龍馬とは似ているところが多数あるとのこと。

まず、南国市にゆかりがあること。次に、お互い目的をもって上京し、大きく羽ばたき大成したこと。３番目に、龍馬の行動力は皆さん知るところではありますが、三山氏も日本中から集まったボランティアとともに、けん玉を１２４人が連続して大皿に乗せるというギネス世界記録を達成させるなど、素晴らしい行動力を発揮していること。

最後に、二人とも師匠の娘さんと恋仲になったこと（三山氏はご結婚されてます）

このようなことを含めて、三浦チーフが資料の説明をしますと、三山氏は熱心に説明を聞かれるとともに、時折、嬉しそうにうなずかれるなど、終始、和やかながらも真剣な表情で説明を聞かれていました。一緒に説明を聞いていたファンの方々も、龍馬のことを深く知っていただけたのではないかと思います。

短い時間でしたが、坂本龍馬をより深く学ばれた三山ひろし氏が、今後、ますます坂本龍馬と高知県の良さを広めていただけるものと期待しております。また、皆様が当館においでになるときには、ぜひ、歌碑も見ていただければと思います。

溝渕　智栄子

海の見える・ぎゃらりい

■「“薩摩と土佐”もっと知ろごっじゃっ、知りたいちや」展から「記念館の冬　静かな海と“京の軌跡”」へ

特別展「薩摩と土佐ー雄藩がたどった近代化の道」展の関連企画として開催した「“薩摩と土佐”もっと知ろごっじゃっ、知りたいちや」展が、12月14日で終了しました。両県の関りや新たな魅力を楽しんでいただきたいと企画した展示には、こんな声がありました。「高知新聞“声 広場”」に、70代男性の方の「薩摩の群像勢ぞろい」というタイトルで、特別展と海の見える・ぎゃらりいの展示について、的確に、興味深く、見に行きたくなるようなご紹介がありました。その内容は「鹿児島の知人から、JR鹿児島中央駅前広場に立つ薩摩藩英国使節団のモニュメント“若き薩摩の群像“の写真が送られてきた」という書き出しで始まります。海の見える・ぎゃらりいでは鹿児島市の「若き薩摩の群像」と高知県椙原町の「維新の門」の群像も写真で展示しました。この「若き薩摩の群像」、建立当時（1982年）は19名の使節団でありながら藩外出身者という理由で、高見弥市（土佐出身・大石団蔵）と堀孝之（長崎出身）の銅像がありませんでした。が、昨年9月30日、2人の銅像が新たに加わり19名全員が揃いました。特別展ではこの高見弥市（大石団蔵）を取り上げ詳しく紹介していました。特別展の関連企画として、今回の展示が将来の交流のきっかけの一つになればと思っています。最後になりましたが、企画展示に資料・写真の提供など、ご協力いただきました皆様に、改めてお礼申し上げます。

昨年12月15日からの「記念館の冬　静かな海と“京の軌跡”」では、坂口澄夫氏の「龍馬 京の軌跡」より、ご寄贈いただいた写真21点を、初めて展示しています。作品は、建物・碑・通り・お墓などが独特の色合いとアングルで写し出されています。坂口氏は京都在住のプロデューサー／フォトグラファーであり、春夏パリコレクションにフォトグラファーとして十数年参加され、海外での取材・撮影、また京都ではファッション業界や地域活性化のためのプロデュースも手掛けていらっしゃいます。

歴史研究家のご友人とお龍の再婚先のご子孫との話の中で、「ファッションカメラマンという視点で、龍馬を表現したら閃きのいい面白いものが出来るのではないだろうか」という経緯から生まれた写真だそうです。坂口氏曰く「史実をリアルに表現するのではなく、対象物にロマンを見せる工夫をしました」とおっしゃった京における龍馬の軌跡、イメージと人間像を盛り込んだ坂本龍馬へのオマージュを是非ご覧ください。　　中村　昌代

「坂本龍馬 京の軌跡」

「青蓮院門跡」

入　館　状　況

2020年12月20日現在
（1991年11月15日 開館以来 29年35日）

◆入館者数　4,348,094人
■リニューアルオープン（2018年4月21日）以来　411,334人

編集後記

新しい年を迎えました。昨年は「禍」の年でしたが、今年一年でどのように変わるでしょうか。期待せずにはいられません。

本年11 月に、坂本龍馬記念館は開館30 年を迎えます。あまり華々しい行事はできないかもしれませんが、私たちは決意を新たに進んでまいります（か）。

館だより“飛　騰”第116号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2021（令和3）年1月1日
発　行　公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般 500円（企画展開催時 700円）
高校生以下無料
高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1 名）は無料

「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。
〒781-0262　高知市浦戸城山830　高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読 係 まで

私のテーマ

史実と創作の間で 薩長同盟を叫ぶ。

兵庫龍馬会　会長
東京幕末GARAGE
楠本　剛

龍馬ファン歴40年

「あなたにとって坂本龍馬はどんな存在ですか？」
「坂本龍馬の魅力はどんなところですか？」

このような質問に、「出会いの達人」「先見の明を持った人」「常識にとらわれない思考性」等、明確に答えられる人を心から尊敬する。

私は悩む。およそ40年、坂本龍馬を敬愛し、いつしか彼の年齢も追い越しつつ…、先ほどの様な質問を投げられたら、「ん～、…たぶん日によって変わります。」と、なってしまう。

おおよそ歴史の人物や事象に関心を持った場合、その探究心から書物を読み、専門家の講演を聴き、より多くの史実を追求、または博物館で一次資料を見たり、さらにゆかりの地に赴き、当時に想いを馳せるという行動になる。

私の龍馬像を創作へ

その一方で、史実にない部分、空白の部分を見つけ、そこを膨らませる、または違う流れの同時期に起こった史実との関連性を想定するという楽しみ方がある。私の場合、これである。以来、イラスト・紙芝居・劇団・朗読劇という手法で自分なりの龍馬像を形づくってきた。

龍馬さんの生涯は史実、フィクションとを取り混ぜ、起承転結のテンプレートとして出来上がっている。

・小さい頃から母親代わりの豪快な姉に育てられ、気弱な性格の少年は剣術の上達で、自分に自信を持つようになる。
・青年になり、藩命で江戸に行き、黒船に遭遇、衝撃を受け、自身の使命を考える。
・脱藩を決意、家族と故郷に別れを告げ、志と夢を見据えて生きる。
・運命の師匠との出会い、国を動かす政治活動の一端を担う。
・身分や藩の立場をこえた多くの人物と、時には共感、時には駆け引きしながら結果を出していく。
・目指したものが結実したと同時に、非業の死を遂げる。

この流れを汲み取りつつ、いかなる龍馬さんの物語を組み立てるか。

物語化の難しさと楽しさ

限られた時間の中で生涯全ての流れを語ることは難しく、ある一時期の出来事をピックアップし、その前後の時系列の中での起承転結を考える。

次に、芝居の中に龍馬さんを登場させる時、どのような人物像を前面に出した「主役」にするか？を想定する。これを軸に台本を書き進めると、龍馬さんは実にいろんな事を語り、意外な方向に動き始める。さて、その発言や行動を裏付けるものは史実の中にあるか？と、様々な文献に目を通す。おおよそこの段階で、今作った台本が物語の展開として「有りか？・無しか？」が決まる。

また、自分としては面白いなと思う筋書きも、演ずる能力を顧みて、「これはうまくいかないな…。」という結論に到る事も多い。それは、（多少大げさに言えば）観客となるであろう多くの方々の龍馬のイメージと、自分の今のスキルで表現できうる龍馬のイメージのせめぎ合いでもある。

そのせめぎ合いのバランスも紙芝居と朗読劇で変わってくる。まず、紙芝居の場合、一枚の絵で、どれだけの話の進展を盛り込めるか、が重要となる。たとえば、薩長同盟締結の場面。左右に西郷さんと木戸さんが対面して座し、中央に龍馬さんが座る。この場面の出だしは、まだいがみ合っている西郷さん木戸さんに龍馬さんが檄を飛ばしているが、後半は一転、三者が手を携えて穏やかになるシーンとする。一枚の絵で三人の表情は、激しさと穏やかさの両方を醸し出すものにし、読み手の語りで、三者の表情が変わっていくようにイメージできることを狙う。これが難しい。

朗読劇の場合は当然、絵は無い。もっぱら三者の顔も観客それぞれのイメージに合った人物（ドラマや映画で見た役者の顔を思い浮かべてるかも）を想像していただきながらのご鑑賞となる。読み手の声に乗せる感情と情景描写を語るナレーション、そして台詞の後の間で全ての世界を形作る訳で、説得力のある声の役者としてのスキルが問われるが、そこは龍馬さんがいつもあの手この手で助けてくれるような気がしている。

記念館・近江屋での紙芝居＝令和元年11月15日

これからも龍馬さんの世界を皆さんと一緒に楽しみ、そして龍馬さんの魅力を広げていけるように活動していくことを目指しているものの、まだまだ龍馬さんの魅力について、「これ！」と一本に絞りきれない日が続くであろう。

朗読劇中の筆者

「拝啓　龍馬殿」　龍馬と私

千葉大学医学部医学科4年　西内 茉澄

「お久しぶりです。我慢できなくなって、またこの場所に来てしまいました。」

私の坂本龍馬への手紙は、大体いつもこの言葉で始まる。坂本龍馬記念館の同じ席で、この手紙を今まで何回書いたことだろう。

初めて龍馬に手紙を書いたのは、9年前のことだった。

龍馬との出会い

小学生の頃、私は歴史上の偉人の中で龍馬が一番嫌いだった。

日本で一番有名な偉人と言っても過言ではない龍馬。なぜそんなに有名で、人気があるのか全く分からなかった。その頃放送されていた大河ドラマ「龍馬伝」は一話も見ることなく、世間で巻き起こる龍馬ブームを冷めた目で見ていた。

そんな私に大きな転機が訪れたのは、2012年1月3日。私の人生を変える、一冊の本と出会った。中学1年生の正月最終日、やることもなくふらりと近所の本屋に立ち寄った。そこで真っ先に目に入った本は、司馬遼太郎氏の『竜馬がゆく』。

世間の龍馬ブームに乗じて、目立つところに置いてあったのだろう。パラパラとページを繰る。長いなあと思いつつ、歴史上で一番嫌いな人物の小説を読んでみるのも面白いと思い、試しに読んでみることにした。初めはふぅんと斜め読みしていたものの、途中から本を読む手が止まらなくなっていた。坂本龍馬ってなんて人だ。たった150年前の日本に、こんなとんでもない人がいたのか。気付けば私は龍馬に心酔し、頭の中は龍馬で一杯になっていた。

不思議なことに、『竜馬がゆく』を読み進めるにつれ、どこか違和感を感じるようになった。私はこの本を読みながら、気づかぬうちに自分の中で独自の龍馬像を創り上げていたらしい。自分の中にあった今までの龍馬像と、司馬遼太郎氏が描いた竜馬像に齟齬が生じたことが、違和感の原因だった。私の中で、本当の龍馬を知りたいという思いがどんどん強くなっていった。そのために、日本で一番龍馬に近い場所である坂本龍馬記念館と桂浜に行きたいと強く思った。その念願が叶い、同年の3月に初めて高知を訪れた。

初めて桂浜と龍馬記念館を訪れた時の感動は忘れもしない。その日はあいにくの雨だったが、それが独特の雰囲気を醸し出していた。荒れ狂う波。激しい波の音。だがそこには、大きな乳白色のベールに包まれているような優しさがあった。私は確信した。ここに龍馬はいる、と。私は溢れ出る思いを抑えられず、「拝啓　龍馬殿」を思うがままに書いた。

「第1回子ども龍馬フォーラム」リーダーとして

それからというもの、龍馬は常に私の心の中にいる存在となった。薄っぺらい言い方をすれば、人生の師匠とでも言うべきものだろうか。日々龍馬のことを考えながら、私は日々を送っていた。

そんなある日、突然坂本龍馬記念館から電話がかかってきた。「第1回子ども龍馬フォーラム」への参加と、そのリーダーを私が務めるという内容だった。私が龍馬に宛てた「拝啓　龍馬殿」が面白い、ということで呼んでいただけたらしい。ただの龍馬ファンの中学生が坂本龍馬記念館のフォーラムに参加するなど、身に余る光栄だがとんでもないことである。務められる自信はなかったが、精一杯やってみようと思い参加した。

そこで出会った坂本龍馬記念館の館長やスタッフの皆様は、熱い思いをお持ちで、龍馬の片鱗を感じさせる素敵な方々だった。子ども龍馬フォーラムをきっかけに、今まで私は言葉にできないほどお世話になっている。坂本龍馬記念館の方々に出会えたことは、私の一生の宝物である。

「第1回子ども龍馬フォーラム」で発表した
中学3年の夏＝2013年8月15日

龍馬と医学生の私

龍馬に出会って間もない頃、私の夢は歴史学者になることだった。大好きな龍馬のことを研究し、

深く知りたいと思っていた。しかし、自分の中で龍馬像が形成され、龍馬が確固たる存在になるにつれ、今まで感じたことのない感情が芽生えた。それは熱くて、身体中の血が湧きたち、いてもたってもいられなくなる衝動。身体に力がみなぎり、意志が溢れてくる、でも胸が締め付けられるような感覚。龍馬に触れるたび、その感情が生まれるようになった。

初めは何か分からなかったが、やがて自分の中で答えが分かった。私は、自分の手で日本を変えたいのだ。何をどう変えれば良いのかは分からない。具体的な手段も分からない。でも龍馬のように、幕末の志士達のように、真剣に自分達の将来のこと、国のことを考え、少しでも日本の将来を明るくしたい。龍馬に出会ってこんな思いが生まれ、それは9年経った今も変わらず私の心で静かに燃えている。

だからこそ、私は官僚になりたいと思った。政治家の下で政策を提示する官僚は、政治家よりも龍馬に近い。初めは文系官僚になることを考えた。しかし私は元々医師という職業に興味があり、その選択に迷っていた。そんな時、医系技官という職業を知った。これは医師のみがなれる官僚で、日本の医療制度の根幹を定める職業だ。

この職業を知ったとき、私はこれしかないと思った。「小医は病を癒し、中医は人を癒し、大医は国を癒す」という諺がある。私は大医になりたいと思い、医師になることを決意した。結果として医学部に入ることができ、現在医師を目指しているが、変わらず龍馬はいつも心の中にいる。

神戸海軍操練所跡で＝２０２０年11月

コロナ禍と、夢と現実

２０２０年は、未曽有の年となった。新型コロナウイルス感染症により、今までの「当たり前」が、ものの1か月で崩れ去った。私も大学の授業が全てオンラインになり、友人とも全く会えない時期が長く続いた。将来への不安は募るばかりで、この1年間様々なことを考えざるを得なかった。

新型コロナウイルスが、世界中の人々に計り知れない苦痛を与えているのは言うまでもない。だがコロナウイルスは苦痛を与えただけでなく、各国の政治の闇を浮き彫りにした。日本でも、コロナウイルス感染症の対応とその過程で様々な問題が明るみに出た。そのような政治の現状を見るたびに、自分一人が政治に携わって何かを変えようと思っても、今の日本ではそれが出来る状態ではないのだと痛感し、失望した。

簡単に日本を変えたいと言っても、それが夢物語であることは今までも分かっているつもりだったが、コロナ禍で現実をまざまざと突き付けられた気がして、将来行政に携わるのはやめようと本気で考えた。

しかし、そんな時でも龍馬に触れると、あの衝動がよみがえってくる。私には何かを変えることは無理かもしれない、でも、どうしても、どうしても自分に出来ることをしたいと思ってしまうのだ。日本を変えたい、その衝動はどうやっても湧きあがってきてしまう。

今の時点で、私は何も行動を起こせていない。起こし方も分からないし、自信がないのだ。「これが正しい」と思っても、私はその事象の全体像を捉えられていないうえ、「私」という一方向からしか物事を見ていないからだ。メディアで「これが問題だ」と言われていても、その背景を知れば考えが変わるかもしれない。また自分の考えとは逆の意見を聞くと、そのような意見もあるのかと納得し、何が正解か分からなくなってしまう。

それを判断するためには、正しい知識と幅広い見聞が必要である。そのために、自分の専門分野でない様々な分野を学ぶことが、今の自分に必要な課題だと考えている。幅広い分野を学んだり、意見を取り入れたりすることは決して容易なことではないが、龍馬の柔軟性を見習って、しっかり学びたい。

試験合格を京都霊山・龍馬の墓前に報告＝２０２０年11月

これからも龍馬と共に

優しくて柔軟、類稀なる発想力と行動力、それを実行する勇気と自信。それでいて冷静かつしたたかな人たらし。龍馬の魅力を挙げたらきりがない。坂本龍馬という人物の存在は、年を経るごとに私の中で大きくなっている。これからも、龍馬と共に歩んでいきたい。

最後になりますが、私は現代龍馬学会員となり、このような原稿を執筆する機会に恵まれ、大変光栄に存じます。この機会をくださった坂本龍馬記念館・現代龍馬学会の皆様に心より感謝申しあげます。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十四）―

大笑いの研究

宮川 禎一

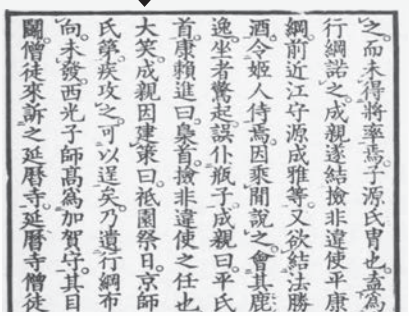
近年あらわれた龍馬の書状の話である。慶応二年十二月四日に土佐の家族へ出した長い手紙の原本の約四割が北海道で確認され、のちに所蔵者から高知県立坂本龍馬記念館に有難く寄贈された。

筆者はその手紙の中で慶応二年二月初旬に薩摩藩邸に収容された龍馬が小松帯刀・西郷吉之助らと寺田屋での遭難事件を総括して「皆大笑ニて～」と書いてある不思議さに「大怪我を負い、薩長交渉の中身まで幕府側に流出して、いったいどこが笑えるのか？」などと考察を重ねてきた。筆者の結論は「寺田屋で龍馬が襲われ、伏見奉行所に押収された龍馬の書状から薩長交渉の中身が流出・拡散（偶然であれ意図的であれ）して、薩長の関係がより緊密になったから良かったのだ。だからみんなで大笑いしたのだ」と考えている。それにしても「大笑」とは幕末にはあまり見かけない記述だし、龍馬らしい自由な表現だとも思っていた。

ところが最近まったく別の理由で頼山陽の『日本外史』を読んでいたら「大笑」の二文字が目に飛び込んできた。平安時代末の安元三（一一七七）年五月、平氏打倒の陰謀を後白河院の近臣らが企んだ「鹿ヶ谷の変」の話だ。首謀者は新大納言藤原成親。鹿ケ谷の山荘は僧俊寛のものだ。宴席中に瓶子が倒れて「平氏が倒れた」と囃す場面に「大笑」が出てくる。原文は「取瓶懸之柱上、一坐大笑」である。倒れた瓶を柱に懸けるとは瓶子（平氏）を獄門に掛けるという隠喩であり、その意味を察した一座の者が「大笑」したという記述だ。

『日本外史』の鹿ケ谷での「大笑」と龍馬が手紙に書いた薩摩藩邸での「大笑」はよく似ている気がする。後者もまた倒幕につながる謀議だからだ。日本史における「大笑」を充分調べたわけではないが、陰謀をめぐらす同志らが、その未来を予想し、さらにはその紐帯を確認するように「大笑」することはありそうだ。大きく笑ったという「事実」だけでなく、そういう「意味」までを含む文学的な表現だ。

まさか龍馬が『日本外史』のこの部分を読んでいたとかね…まさかね。



『校刻日本外史』より「鹿ケ谷の変」（部分）

“話してみるかよ”

「和霊神社の精霊話」

川村 貞夫（高知市議会議員）

「160 年ばあ前、若人 (わかいし) 二人が洋々とこの参道を駆け下って行った」。

和霊神社ご神木のヒノキの精霊が語りかける。

「確か 28 歳の若さやったと思うが、それにしても思い切ったものよのう」。

「それから 5 年後にその若人 (わかいし) は殺されてしもうた。」「無念よのう」。

和霊神社の参道に最も近いヒノキの大木は、龍馬の旅立ちを見届けていた。

そして、その様子を語りかける。

文久 2 年 3 月 24 日。雨がそぼ降る中、坂本龍馬は同志の澤村惣之丞を伴って土佐藩を脱藩した。係累に罪が下ることや、前年に同志の誓いを交わした土佐勤王党の恨みよりは、江戸にでも行けば新しい風に触れ、息苦しさも失せると見込んでの脱藩であったろう。閉塞感よりも行動を選んだ。先に脱藩した吉村虎太郎に続きたいと思ったかもしれない。

土佐には、自由がない。あるのは上士と下士の間にある身分差別である。たとえ、剣道場では実力で相手を負かすことができたとしても、悶々とする気分は晴れることがない。もっと自由で、誰もが幸せになれないものか。龍馬は多分に精神論者だ。静かに考えると、ますます鬱積した気分となる。

たいまつを手にした筆者（手前）とご神木＝ 2018 年の龍馬脱藩祭で

たまたま、自分は次男坊だ。家督を相続する身分ではない。もっと自由にと思う心が脱藩という大業を決断させた。土佐勤王党の同志たちは怒った。「龍馬をたたき殺せ」と。しかし、瑞山はかばった。「捨て置け、捨て置け、龍馬は土佐にあだたぬ男じゃ」。

ヒノキの精霊は、続けた。「それにしても、脱藩してからの 5 年間ぜよ。龍馬の回天の偉業はわずか脱藩からの 5 年の内ぜよ」。これからも語り続けたいかのように、幹は大きくよじれている。

龍馬を慕う私たちは、このヒノキのご神木にそっと寄り添って、聞き耳を立ててみよう。

第13回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会

テーマ「龍馬の思想と行動」

●日時　2021年5月22日（土）10:00～17:20（会員総会9:20～）
●会場　高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
●定員　50名（参加無料・要申込）

《研究発表》

10:10～ **網屋 喜行** 氏（鹿児島県立短期大学名誉教授（「吉田」本家末裔）

「石尾芳久氏の『海南政典』研究と分析道具のウェーバー『官僚制論』」

11:10～ **山本 修** 氏（株式会社便利堂 コロタイプ研究所所長）

「コロタイプ技術で龍馬の手紙を複製する ～100年以上前から続く古い写真印刷技術の話～」

《特別講演》

13:30～ **大石 学** 氏（日本芸術文化振興会 監事）

「坂本龍馬の現代的意義」

《研究発表》

15:10～ **坂本 世津夫** 氏（国立大学法人愛媛大学 社会連携推進機構教授「地域連携コーディネーター」）

「明智光秀と龍馬」

16:10～ **前田 由紀枝** 氏（高知県立坂本龍馬記念館 学芸課長）

「『新葉和歌集』を手がかりに龍馬の思想と歌心を考える」

※参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。
※状況により定員数の増減、また発表形式や時間・内容を変更する場合がございます。

【お申込み・お問い合わせ】
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会事務局
電話 088-841-0001　FAX 088-841-0015
メール gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp